



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Tama

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN



J. Tad Kandy
3810.50



綵錦卷之二

沿涼錄

一
卷
五
首歲不二

首歲不二

蓬萊山

露沾

名を句つて御ゆふかく花の雪

清涼

○新編撰

外の根ひとりありもへども
中等玄親王

○身延のたのむ云あく井のさくより爲めのをとく
碧一天雪自白雲間走卒兒童亦仰レ顔
東海初遊多少客富山不三敢テ問何山シト



二番 左 脂

篠びしとへた／＼カドの薪籠

吟市

○枕まみれぬめうきもの柳のとえくのまみ
うじゆうかうるえのまぐりひあく／＼
たゞくさめうるええの枝づける
○世故同音 正月はお湯の月で又七日はお湯の歓
おて旅店をぬめねの旅すがまそ喜舎と便へ

右

みよもん家のもとにも雪崩

沾涼

○古文集序 人丸に赤い火を落したくやうに
人丸の赤い火を落すがくやうにあれば

三番

左 極

御志めし人をぞくある兵の槍

東隣

○果堂諱語 梅一花、倍入、師

却く風 右

かく風 かく立く水ノ木ノ周乃梅

布仙

○碧巖集

隔山見煙早知是火

○千載

隔壻見角便知是牛

○千載

四番 左 初午

一日ハ水にと拍子をひの牛 魚路

○杜詩曰 魚吹細浪搖歌扇 蕪嶺毛花落舞筵

○千載 三室山谷すやまの立ぬしも乃下水

中納言國信

未午 一日足らず秋の露 沾涼

誰敵計會一時被

風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜

五番 左 え

をのう雲あんじや雪を 紅葉 溶く

○支本抄 同かくとをのうせのうをのうちを
ちうて入するふさくから後赤れ
○後赤れ 花のさうは多坐より而ス十日ノ時正
えりは七日より立赤より七十日も

右

花らむや遠よその檜木檀の上 カ

○桃ます三つともうなづらこの、さんてもいふ
もひるいぢら、まくわいあけむをゆきと
よひつかむか、けすむをひよどりて
かくきよだせる、ひくへう

○未有三世子養子而後嫁者也 大学

六番 左 ひく

今那くむしりゆるルヤムヒク

水戸相田民沾鱗

○新古今 浪鳥羽院

櫻

いふくわ
くまよみのちう尾のさくく一月もある

○まくやさん元の娘をタクミ 宗祇

右

まくや元の娘をタクミ 梅五

○詞苑 利を経ておゆすとすなる

風よめとまきよみのちうもる

七番 左 ひく

益乃源まとハねにまわりゆる 琴ナ

ふきハリスケモノの匂なりす

琴ナ

○金葉集
新風のあせまりせん葉の花何よひきる
良運佳時
○續古今
五月雨のみうらすまくて涼風をさむと
見るより舟河
祐威は跡

右

匂匂小船簾足せん夜露
沾涼
○拾遠
利ちの浦の浦アハ向よ露冷せよと
ゆくじぬ人の身先人丸

八番 左 ひかき

と吹十又拭り冬拂リ 東巴
○新後拾遺
山吹の花一木の波も口なしにうるお
井戸より水が
○七名拗
井戸の太古の堂ハジメモ模倣する
子の事ハシナリトトトと有てゆる波しづく

右

ふ吹きよ太川あらひの日脚外 沾涼
○過艸山人所居 寂々孤獨啼杏園

寥々一太咲桃源

○支本抄
胡蝶によんへゆくなほよのを教
のぬゆきをさうめる 玄空

九番 左 ひかき

九万里を登よて今ニ宿雲霞 正典

○歸去來辭 鳥倦飛而知還

○莊子内篇 北冥有魚其名為鯤鯤之大不知
其幾千里也化而爲鳥其名爲鵬下略

右

うほくの人にあらゆるをす。沾涼
○朝明後 回すをぬい。酒室も天まく少しだ。
うねるに立機の如國事

十番 左 郭云

寒涼へあそばせ。千洗

○お拾遠 時をめくらひ。うらうらねうら
うの田のすゑ今やうし。津守四友
○お凌車 引はくわくのえをくわく。風のうね
四のさくらんをかきく。松波本義下
○月 アシタニミテ うらうらのうらうらのうらうら
時鳥 韩云 子飛 駆農多 杜鵑 鳴鳥 遊船 杜宇
鶯鶯 蜀塊 望帝 別都鶯宣青 鶯 青鶯官鶯網青
童子多 背直多 背毛青 遊常多 不知帰 四色の田長

之時不熟多 姉脊多 常記多 立露多 德言多 石聲多
庭故多 玉京多 升苗多 田奇多 羊浦多 犬多
淮微多 駿河多 宁波多 里長多 仰目多 免律良多

右

楊東乃 灯火 あざめり 郭云 伯涼

○拾遠 アシタニシ よみてりらんほく。JR海の
うらのまくい東ふくよ。忠入
○袋紙 ハコ 俊丸云折りよ叶ひする音を仰ぐる
かひよます。わくし前齊文海京の時候。其の
人取手よへゆきしてある。音よ郭云一音の歌
しきう方人あくす。この音をよまく。とぞよ
れ女房の歌にて。波のまくのす。夜今きよ
とぞよくうる人。うつてつまく。いやまく。

十一番 左 田云

脊中乃子泣ひよ坐て田極加

信州松本 三省

○枕ま子 加藤へまうきるみよゆすしものあ
うきれをのやくなるのをせしむつて
ねぐくとそりてうをくくひかこすすい
たまく何ももぬくうーろよぬより
はあらようあんちがーとするゆくよ
いきくしんうくかれてそとづむ

ト略

右

服ぬば袖はくもと田くぬ 布仙

○千歳 廣瀬川あるみの小田にせた今袖

さくとるさぬへよ 法印定寺

○催馬樂 次田川袖はくもとあさととす。
あさととよめやくみはくとひあつと
うくよめやくくとよめやくとす。注云袖はくと
うくよめやくにゆるとうくわくまきと云

十二番 左

えみ衣

山門一入一下夜御油乃事

具サ

○大和物語 月をかくもとひくも反の承の月
もとひくも反とむりかくも。太東智坐の令袖
丙辰紀行 離宮子云英は少貴墓邊の池田する
を鐵方毛も出来を君ありてひくハ徳安
武文治院の年輪るを門より是れ十金
安分を嘗ふ不なしとて下客 今ハ御油赤坂
キテこれす

右

もとひく一里も夏の承の月

沾涼

○本遠 あけくの後くの後うのひをかくも

中想

三番 左

竹子

鶴門はすい草乃勢ひの都

立鴨

○山谷詩 竹筍初生、黃、犧、角

○漢書軍談 門ノ閉ル樊噲コト压セスカニ至ノ門ノ庫推傳門

立鴨

野外宇都宮

立鴨

○下

○六

右

うりのくや今雪舟を盛ひ音 沾涼

○支本板 月とるふへ船ぬと人とだとも
すく一わいあらそくし和氣式ア

十四番 左 野渡

舟舟や、ねくより路 乃舟 倫仙

五月雨にも夜の月も青むひやまをあやさ
○船取ノ行 大和物語云ト野川あいだとせ往
きくまくらすよある船の男めまくけて
かがりもとげあすあやさむれすを今ゆの
あくまくひそひそくらすよのねものとくみみ
へとねすをくらすよくらすよのねものとくみみ
をきくくねたくのくらすよのねのねの
あやさむるよくらすよこのねととののくらすよとく
するわくはくらすよくらすよくらすよくらすよ

右

届ひて先一にて漕て来る押陰 沾涼

○傳 嵯峨ノ川の加納院ひづかの母よやくれ

○傳 嵯峨ノ川の母よやくれ

歲時記云 自初春至初夏有二十四番

風始於梅花終於棣花謂之花信風

十五番 左 まくみ

ひまくみるも水乾らうま渓川 紅夕

あらわゆきもせせ入へ木を渓川中いに着

○方丈記

水のすゝとひまくみるひまくみるひまくみ

涼——こい足筋を越ぬ流とくね 沾涼

○達然草 ひまくみるひまくみるひまくみるひまくみる

十六番 左 夕立

越前雷中
北仙鶴

夕立 や 溜のわくうてまゆ湯氣

南花

○若葉春云雨もくすすり死ふふかほひよす
ゆきとすりのゆきとすりとすりとすりとすり

右

夕立 や 下隅立ぬ壁と武藏

沾涼

○菅家御集あれぬよもあやう夕立
もぐくひるぎむすゞのほ

十七番 左 朝さ

歎八耳に胄ねじりあさか

一店

○走獸ノ中々象ノ耳ハ異ナリ

異物志云象ハ身數

牛ニ倍ス鼻口ノ役ラナス馴良ニシテ教ラ

藤

吉ヲ亦トキハ歎ツク矣

石糞、て牛のあをのゝ、要ひか 梅立

○夏一日極熱天燐カス 烈法

○格物論云牛ノ母ヲ狩ト云父ヲ狩ト云子ヲ捕ト云人皆く牛との角をまつて馬をまつて耳をまつて

十八番 左 蟬函茅屋

水戸

巻毛もとくと首を遠らや蟬の聲

沾橋

○智度論云春末夏初以時熱故小眠息除食患

右

暮吹や蟬にゆきかわの聲

沾涼

○周易の推の卦をとよとて耳のまわくすり蟬

十九番左移川

卷之三

人ノモハガシニシテモ拘縛シム

逸志

○智度論云一切空中六命為第一諸罪中六殺生為第二諸善中六不殺生戒為第三

右

白髮人、此處にあり移網舟
涼之

○莊子雜篇漁父
有漁父者下船而來鬚眉
交白披髮
揜袂行原以上矣

交、自、推、髮、揃、被、行、原、以、上、矣

の事もあれば、かく氣ともがれとがま

かの子の叔母をもぬる者なし

水户沾渡

拾送
あくの
称す
八条お
土突根
廿二
テ月
あり
カニ
月まで
のち

6

丹波守重吉行持

於嵯峨之上

○三十九年五月
筆原と云ひて
丹波國眼下に有

廿一番左 一葉

卷之三

後魏文帝
生兩子一
棄名天下知

○清商子一葉落天一知和
○千秋都よいまいもと來りて元

○東經云 文治五年七月廿九日河の國を立

○圓相神子所奉體。此る景季を石一あ時へ
神秋なり。無因。古風。只ひ出うちやのり
作出する。京季馬をひく。一首を詠す
秋風は東本の音をもとせて君の聲を國に通す
○不破。高光院殿。富士山より。ひしを旅の時
四そそぎ。かみ圓山。民家もあらず。但
ス。うよ。まき。さざげ。もあら。あら。うよ
月をみて。月をみて。你ねひ。く。ゆき。ゆき。せき

右

沾涼

色、鮑乃一葉。うね

○東鑑云。文治六年十月十二日。遠江。菊河。岩手
あく。佐々木三郎盛。緑小刀。お。副鮑。楚
割。を。折。あ。す。姑。子。息。小。童。を。い。宿。す。
進。ス。申。云。口。今。削。食。セ。め。い。不。鮮。味
も。こ。る。銀。切。な。り。ち。く。さ。く。め。す。き。う。き
め。す。自。毛。一。毛。わ。め。自。年。と。あ。る。
け。ら。え。る。く。の。ひ。ふ。れ。年。の。う。な。く。大。事
れ。期。

廿二番左 翌三

金波鶴ト云

風よ。涙入。都。ひ。う。き。雲。氣。か。 祖。皇
○墨。公。卷。云。止。の。ト。う。 も。の。も。か。う。く。あ。く
そ。く。か。い。か。り。し。づ。花。と。も。を。く。す。を。く。
さ。く。ち。あ。き。じ。し。づ。か。人。よ。あ。ら。う。く。か。り。
お。ひ。さ。く。う。く。底。ま。で。含。ひ。の。つ。の。お
く。う。く。ま。く。よ。

右

沾涼

物を絶。小尼。八日。く。よ。と。墨。氣。か。
○綾衣。都。ひ。う。き。よ。尼。よ。な。て。三。ひ。と
さ。ら。も。の。や。ね。の。あ。と。を。く。ひ。く。
剣。お。く。一。原。の。原。く。く。れ。う。と。と。ま。れ。
う。の。原。く。く。れ。う。と。と。ま。れ。

廿三番

左 月

自。鷺。と。く。椎。柴。醉。室。南。嵯。峨。

千。楓

右

まよのま鳴らす。ゆめのま

梅立

○呂川駮頭補陀山海晏寺
○新勅撰
○鳴送孟東野序
○以虫鳴秋以風鳴冬下略

廿六番
左
就泊麻

笠の水す年を探る。——森の音

○秋夜宿淮口。風帆幾，客。天地兩河星。

種 靜 禽 眼 州 沙 寒 麻 過 汀

古
之
文
物
考
古
之
文
物
考

おみきの種席すゑあくや
詠涼

○日本記　里をばかまきを坐と云ふすとさうの上のもの
をまかせむるをいひ、みづみのやまの山すとさうの山
をこそて忍すととつひりれせ女麻のえよく
せんじて土をまうめんへんあるなとひひて赤
ひつてんりれを崩してするかととまつら
を付こやすてそほもだれもかくしゆく
とそもうおゆをまわせしと云ふ事の因みす

廿七番
庄
秋水素

卷之三

待
○權德興詩
空園沉鬱夜
羅冕出民
露

皓魄臺
露庭

○新晴後　月ととしよそのものを移り
ころをつくすがゆのじうめ

右

是もまく　杜が母ひふそ外へされ　沾涼

○詩詰云　杜子美母名海棠故集中并海棠詩

廿八番　左　落葉

松の背の風をかづく萬葉の景　巾車
○菅家御集　引き落葉の風をたゞひづよふさ
りげてあやしむをとくぬふくわざ

右

今朝から申慶が木の葉や田子の浦

布仙

○丙辰犯行　西土門　海防方の急流より下駄

○新古今和歌　後醍醐院の御のねのすすみ奔流すゆひ
紅葉はれどもこのをよむ御のねの落葉深空に
翁太よあてまくわよへいとむかへ夜あすと
廿九番　左　ちよ

ゆゆくひよく　裁はらうか　賀朝

○鷹谷越　頃广の北よりすずりし古原をよぐく
翁の秋のまつゆ　鹿とうとうひすりだるも

○歌・龜・指・聽半夜鐘

右

ぬう星の小ほゆ　もとを遙千尋　沾涼

○次テ卷　もひのよもよとぬあうこみすす
かとうひとあつとあるとるは　おぢりともちがひて
あうみのりくわねまのとくもきのとく　まわる
まわるくわねまのとくもきのとく

三十番左
かし

仁津清水村

罪の如きを素因力の巨塔外 東社

右

之方以稍子貞半得其和布仙

○唐詩注云 賈直言 吐事退嶺山妻董氏云
昔死可別嫁 壽不客引繩 束髮君非手
不解直言照三十年還暑帛宛然夕

かくしてひどい事もあつた

か葉　身な一よ我下細のよひるへ人よ
うきよかすいひよひます

か暮れ 月なつよ紙下細のちりふへる
三月の夜かすいにあます
廿一番左 ちよ
うきよめのあめの底なつ 楠の上 雪朝

卷之三

まことにあれよ底なし
楊の里

新明鏡
月の夜の木の枝
道晃

及筠商山早行詩
雞一聲 茅店月
人迹板橋霜

七

諸事のよひの考案を承取
沾涼

月夜の落鳥
晴雨相間の天

世二番 左

ツツキ

空室うす音のうづや花文路

音里

○白氏文集 与君結髮五歲

○詩人玉屑 筠童吳天雪 韶香楚地花

右

鶯舌やあくはくめの奈柳

布仙

○若葉卷 もやのひをもとをのえんがりを人う
にわひてうきいをうきていとあてやが
二月の半もろのち柳のうすよあくは
ゆくつむらへうすゆすのねせんせん
うのほをうめうじをうむかくわくわく

世三番 右

我ゆうう枯葉了四之和光合

涼宇

○よよく音押 生柳ともあひはーとあくさな今
アヌヨリハ音とくまでいと柳としがく
一すこえしわくく けんとく
もじく被ぬきてゆきまたまきせきのまうり

右

墨ハ枯葉くおのく三葉二又富士 沈原

○もる富士郡

西原

○ぬの根をこもるくなりぬめらぬをいにひく

○じつ黒城山

西原

○ぬの根をこもるくなりぬめらぬをいにひく

○まま頬娃郡

西原

○高さすよ壁のよしのよしのよしのよしのよしのよ
およしのよしのよしのよしのよしのよしのよしのよ

雪うるみあらじ

世四番 庄 ほら

紀州若山

方圓の毛のを傳へる銀行
○支本抄は井筒いのくのうちからうけぬます
○水順方圓器

右

身 桂

梅立

風磨永ラハ寒兒
○文選宋玉風賦 其風中人狀直體淒淋凜
○新東洋 みづくやし井のほらじよひとや
○宗祇名不方角 ひねりよく巻きを一里あゆり東
とうてせんあり藏王堂いくよしゆの井
あゆみに巻筋のゆびつてはる巻糸、東也

世五番 左 ゆふ

未石

○無門圓云 春有百花秋有月 夏有涼風冬有雪
○枕羊子 こうい正月二月四月七月九月青
ふてりうつりうひくせうつわ

右

すらぐと雪の根乃せ荷取馬 沾涼

○延喜式 凡諸国驛路邊植茅樹令往來人

得休息

○里柳、鐵田信長母の三十ニ禽を表して一里
二十ニ所より下りかねの、すれお松の表しを
植す事とて、かね余の木板の、すれお松を
植をすてり余の木板の、すれお松

廿六番 左 藏書

五百武

人より我より能くよしの者

○荒木田守武世中而首

身中のをありとすらてあひゆくとおもひ

○西行賦云 花依風散人依友知情

右

信濃なる歳暮車やうしは上

詠序

○信濃湖の水のことを狐とぞな人馬往來せば
○述異記河水始テ合ス狐先行テ後渡ルコトヲ得ル

狐河水渡ラントシテ水声ヲキイテ后スクルトイ

○此三十六番八句合ハシを結び一讀とする所

まことに詩古奇古詰成八句のふるどりありあるのみ

○他國宗臣大略

・・貞德

良德

良保

常矩

又李門十

和及

竹亭

現暮四石齋卷

抑とえと為奉徳事たひ外

和及

ちゆれ月夜至と聞そくとされ

竹亭

下崩や小走の春の服すく

京 暮四

・・貞德

梅盛

信德

信安

押哥奇去多幸

もかかや持子にかひし時分 信德

京 暮四

・・露沾公

沾德

現仙鶴

也かく年生れものすく五月

雨

京 仙鶴

・貞徳

季吟

芭蕉

其角

現 淡く

東こうくもひづらあじうかの雨

京 淡く

雪零我に寐との盈間（はな）

蕉門

大坂 路通

六月十真秋松原度（はな）

日門

野牧

津々川（はな）さき鶴（はな）

日門 尾名吉房

露川

・宗因

西鶴

現

才店

舊徳翁

鮒ハ禱ハアヌ迦室もあくせす肩

西鶴

麦ハ禱すみどり

小山伏

才店

・貞徳

圭頼

現

鬼貫

吉野氣のそよれて而一林の香

大坂 鬼貫

正秀門

大津

松毬

○伊賀上埜連

・貞徳

季吟

芭蕉

其角

現

原松

猩々菴

原松

牛糞仰テ女を入る山山久

猩門

り毛を行と御す

神伎事

笑鶯

多鶴ハ茶（はな）いふ

即將毛

菊而

葉のそぬや本縫仰の膳乃見

熊焰

斧仙

三方望テ紅玉やす

朱の角

桐離

許多毛を答ひら

紅牡丹

省我

毫々根莖をすすゆれ

外

松甫

記之

天正年中伊賀久米郡主菊岡丹波行任

房行

治原

貴饒夷威勇

○行宣

菊岡隨性軒

行尚

盡程舍

現

行重

記之

和歌ヲ善ス

現房

有隣

世談一統三百卷編書其外述作有多

行

現房

伊賀久米ノ袖合山九品寺に在今余の

碑を立てる事を以て

隨性軒如幻

まことに神合ひよけくかが生の爲めに立たれ

五十家ノ春沾源立ふ云ふ

行尚

數百そのかじわの今朝の雲

行尚

題曉寫

うしお十鶴八季休間主

伊賀
菊岡
記文

年書

享保十三年秋夜布尼故ノ紙ノ上にて西
對する教属多り一教會事

伊賀
菊岡

尔種をアキシムの夏木立 有隣
故園今石もたりもモ机 布仙

芭蕉門人

景と底く伐と枝や昔あリ し由

團友門山田

芦本

○紀別之連

山里下 鴉味口傳——のさう 環山

或人字めはすくあらむを傳

ひよせく松とくを柳——冬嶺

○下

○上

○中

同子が恨あらうとすよ被ふ如

湯浅音

鷺舟

吹笛て雪のアーやされハ酒
簾晴る萬をうむる柳か

守株

山茶井

ふを煙て海風の阿マキを
不思議に書はる尼不つひ
じ一干やむしノ神ハ高石奈
梶の奈よ年あやゆを波シ

鷺舟

環山

守株

豊山

云に煙から萬や葉の照
鰐ぬる岸に成洋く音もくね
波也ゆ

冬嶺

山茶井

不月や萬よとく一縦とも
雨よ女龍巻を抱て月夜る

まれおうか
深山の産物

山茶井

横ワてハシナ時雨のさむち
一段 天ハシナキシラヤ
帷幕の荷うちク月の車一て
海士の浮揚へ移うどんと浮
簾を研ツハ布馬、袖よ草の角
菊と豆腐ハ仕ヤ
ウ薪入ハ先鳥了所、太め瓦
裏吹き、ソロリソロリ
ひの言を鶴絃ひきくわぬ事門
紙絶の枝へつゝハ沙附切

雪沾 布仙 雪沾 布仙 沾涼
雪沾 布仙 雪沾 布仙 朝

○下

○上

○中

八宗、殿の傍邊より風つあふれ

船を押出ス取屋ハ肩

儒者旅乃唐ラヘちつリト三四(誠
きみももとよすきせれ一中

同てつてはきむるの鷦子昆蟲
もめぬいふ上の扇輪中

月の星花の水すかし男だれ
機音へむくハ七三くら

寺陽草数屋富岡へははは

我が一そくいもを自慢、

久ヒロシロト小桃の實のみ

比丘尼ハとく跡吸ひ洩

布仙

舟泊

多ひあり鶴ハ魚ノレアモ
歸附テヘ借リ高カ一ハ溢
聲ヨホ承母切合を計ム半
山門ノ門ノト十三セツ
蓮と落波聲の高歌の裏(未
知)ハ志ゆりつるもまじ
つての重ひよし御母ニ流
阿宅えくこ人ノ系子姫
信馬東の相子は合に产育
よいすりひどり出うセ新氣
大ちい夏のまくぬきひよし
くわくわくと安い施婦

もみねの立候のうのれ花はる
せひより一卯比二月三月

布仙
作深

題東敷山鐘

雪朝鷗

石内氏

叙叟

秀滿て笑ひを呑む甚五郎

師不知 桜木氏 宗因門 現

音雲 同苗 長子

蓮之 同苗 現

丈雅 同苗

長子

毛吹草 花の散ら落すもの金の松四行

政則

江戸八百員入
お家入り 天馬もすすり時も

音雲

續江戸袋 何人の夜も度次を小水附め

蓮之

神主よ太根拂せて萬葉抄

文雅

七夕

セタヤ歎の底ほ娘あり
拵よそ大魂よ遙一室乃み
天川アツカワ豊川ヨコカワ ふきを今宵へ第へま帰室
佇で身す室す停 勢廻由井冲津
旗燈を一徳み流せ天川アツカワ ト宅
一日を力を波す天川アツカワ 李原涼
が後あらの水なき皆歎う銀河
牛牛や枕のひびをも背せ
底根音へ出てかく今宵空の音
波御云男もいにし里の川

アツカワ内 沾京門
日月 渡辺氏
左隣 植絃
吳竹軒 薟巻
李原涼
麟仙 球理石
彦琴 素琴
彦琴

朝顏

あさくはすづか茶屋の竜田
釣り人 邦麻の人の福の神
あさくはすづか玉子の丸も桶
加部や鷺すゑびれの多半
あさくはすづか傘張す手せ
香とえとよしを
あさくはすづかツトリ
あさくはすづかをまえ女後の後
加部や鷺すゑとえの年もとの
加部や鷺すゑとえの年もとの
えのふすまなにに里おが
鶴龜より附のはやち土用干

千翁門水光堂
沾德門一簾角
桃翁門巾有風林車

日光東原山北河内
事多の事と徳川より多くも月
今朝うちか時うちゆくとも馬
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
里へまよ頃よ山谷宿サ外
世界皆食を樂屋よクヨウ月
きよの月考よア様も身を取
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋

逸志齋角宅新居
有夕安鶴史路
佐佳祖史大和郡
葉鹿山人云

卷

百補子向陳新ノ如也の月

竹裏

君は一ノ子のやうだよ

琴月

卷之三

北尾氏
千 洗

詩言月之由，物久之無。庸生

竹田

西行の仁王の歌は新せ
て草木よ、あめよ、
うらうら、あめよ

卷之三

感をうつす
行頬をうなづく
その内

仙魚

莘の名を諱す。十三年

易
戶
次
王

東北下流の處
水底に於ける
水草の根の
形態

五山堂

秦姓文岳稿

とろくのきの年よもよては雅なるいは
風の月雅歌をへかす一朝多くかくま
くらむものすよほこの風雅の和前へやまくま
よひなりうつむけしとく鳥りく
風へ諷へ其時く乃
雅へ正す、おとづれ欺す
吉忠正酒みだし

其時々く
吉忠正酒子酒
雅ハ正ト
あふるし

國内大小雅なる早によんぐ人の多くあるも猶也
は誰いによかくすかうかとて温かよひのつゝの
或拂人湯湯すわびにを志のじきの廣きはし老の翁
りうれやるをの夜ふかよ、ともかく年はかくとあ
うかくとえどもかまくねをせんよおもむれ樹

さるよを下すもをかくわるみゆき
世とよよじとよむけちくの季
又云ひては人の子をあるとがくと我ひすの
若子をよみふに嫁へとくと考へてはくを
宣へ連ねかた金子ともまくの風雅と歌風雅、
风雅の根元なまくし酒をまくへをす風をい
雅人といひてよもうびやうにいをとゆもあ
きをよみふじひせんなる事より角すら我意あつて
象傳の義りて爲すがゆる。あく風雅のうを
まくよみふかくすよもうきと御せう事と
すくわくよきよもうと

詞體

人ハ至る日やう風あり 肥國翁 文岳
あく風うどんにまくはく 咬
て下されて處つて徳のむくとて
毛をうそしよ 通入長指
我からぬて嘗あするひま
あしても九文裏毛すて 深
茶儀をうすくすくすと芥川
竹すかけとちひくとて 墓
墓みを剝てひまやも庵でま
仰用のかへりふか雪
一軍せぐと舟ねの具是下
納と船の下す 畠

錦のゆや絶せんからくす
の角をひきく確る所歟
錦の筋をもす内に藝
出、れへくばー柳さる
あり花あらぬもと雪潤
結地の香も、いませぬ梅
居月品も一同其も詠荷にて
携ふ至り金の裡と
魚、般虚ハ席、まよひる
卵、そ、せし子ようけまる
うがをゆく遙か年
又合点する。自一作の前

店までてはとお山用十石
新、射の内見えせる
流不へ自を看據のみよ經
足、因人、をうむる爾物
圓軒の焉考乃経はあらま
ト中の錦、並ねばと
ぬといふに枝を纖すと
三ツ抱付、波く手さ
小走、湯氣よ、水をよまし
御、錦く能く、其の修羅
柳、さとと脚くとも

調和

风和

江原氏
壺竹軒

調和

壺仙堂

同苗長子

生と因ての平年冬からぬ序をあるる今も
卷下り、ゆゑる。初音本とす。 風和

ある。作と紙と肉の毛門 調和

夜梅

調和

介我

贝我尚

破田氏
總列縉城住

周午

長子 同所

神くを下らすは一ノ壁和
久の難で二月のきよだに一様王
えとめの書石ノ里と深とさだ
我尚

六月の朝ハ節句の人通五
加郎へ勇士ハ兄弟とりと相
名前やうへまくまくぬいせの波

賀宗直
論 犬
足
路
東
巴
倫
蘭
仙
肴
吟
有
舍
因

海浪地一里ハ止き壁きくい
物ととこ三月穂を志とく海の首
中よりお茶葉野の獲茶屋
虚岳塔の下終ようするむ生外
手をある。前壁城の土足外
石壁の邊といへどそれ壁つね
一ノ坂をえと。宿の花壁がみ

吉房内多賀氏
論 沢門
沾雪

良夜

童陽 菊

千至門 雲浪堂 龍角

大陸をみ給の中ハ菟草
あきのれ菊子とて款の惡
おき在や一朝の歸れて菊の足
きの底の皆波なりか入島
茎を呑ム魚友連やまくの酒
名のためよ多井鍔(き)菊花辨
九年酒の因にちよ呼ナリの菊

生植

咲び日十餘日すとくと葉鱗取
蕊粟下落八月十夜衣
カ内才路千里、あきのり推原
中くくの月や場所

素賀朝五山其遺

えのぬね柳子の朱江外
不化寮より玉章あるとぞ外
字筆(ひらふ)うつ今(い)改(め)る
中くくの月や場所

童角家士
交月人調山
智十
紀列若山
一瓢

厚の菊、幸い二階もあるもの故
居處(すみゆゑ)田より換(かわ)けの下有外
被虫(ひじゆう)もなし、一束(いそ)のぬを參(さん)
侍(し)の松(まつ)、ひーひーの松(まつ)
の厚(こだ)や氣(き)通(つな)る夕廓(ゆふらわ)

雜株

香竹(こうちく)と裏(うら)絨(ゆう)のなす秋(あき)の山
風(かぜ)て風(かぜ)、神(かみ)はどみを放(は)生(なま)會(わい)

露門(ろもん) 咲(さき)市
露泉(ろせん)舍(や) 水(みず)加(くわ)

○下

○六

花園 声色を出さへ置かる

須貝氏 露庭

ぬきで出で乳いあゆも露け
人まみの人を取るがり

小野氏 鶴史

大さよやゆの氣のうれい庵

十萬門右月考 左

牛鷹をだすよ那うしの音

加賀氏 好快

新酒でその音ひのゆの里

千葉門青月考 夕山

小東源をくすえて山と手

善角

いよせんかきゑ儀 金林寺

如雲

船はよ海土も漱するゝる浪

市 水戸佐仲氏 沾涼

石綿よ風へあふる草川舟

雪朝

野はよの船り一舟や石綿舟

沾涼

秋情を残しあそばね一本

水戸佐仲氏 搶

相引湯本より

中鶴不ねて往く水沙は夢を取るに
夜の聲の外あゆはらひのゆふくわ
萬々の病葉たるかくは風亂と音大聲
中うつ方ひむはうか音はゆふくわ
白中のゆくとれ東はひの花早り
中鶴かくは風は風ひし墨が通す
山の雨露をもととすとす

三月十九

翁風沾涼

翁風沾涼

1 布の橋を宣言せ事もよし

13

○下

○上

荒蘭崎　喜多と年少　はるの寒い日と
うの月をこもりてゐる　魚路

もるよしゑみうみのれある鷺今す

五石巣の三夏をさやや代の鶴

鳴立沢　水にわらふ

の波の川　風　ましゆく　かき

陽　本　　舟の角くと賣はし船は年々

小里舟の忠の底賣角八舟

ニ子山

アミ　と　まく　あはせ　二子

箱根社

五の木の冷てぬ　てぬ

水　たゞ一十九人の金子と賣つね

茶の請儀

とまく　九淵　川　ぬく　あひぬ
斐も葉すも香樹からす風
寒　うけ　たゞ　ひよ　鹿をと
身　舟　うちの　あする　立人
森　あく　水の　朝日　げす　舟を
ね　い　み　残　白　　翁　路

魚　沾　涼　路
宿　涼　路

湯　そ　ぬの　生田　や　ゆ　と　高秋

松　老　う　笛　土　を　かめ　よ　かづく　、

もくらんと　え　す　よ　匙　花　あや　先

短　と　一度　よ　味　鳴　大豆　の　古　倍

○下

○上

新集とくとくとおふき乳止
裾さんざいへ吹上ひ松
塙のまく味自北波
いとよ跡を抹香かの
隅へ艶乃島のゆづ玉金
まれ極千トシ脚船の繭
物ひひの船子焉う海七星
えもき魚六ち舟又らと
休保船八木、い妹森ち
浮て舟の龍接ほころひ
单鞋をけりつゝま一葉と
茶酒併飯とタウの前

15 魚詠 浮詠

書はる玉歌うるす令天色
因尺子因尺子因尺子因尺子
自顔じえんとうくへ齧の表
何」や、匂よがるがよむれ
そらまくと蟻取事へ四條通
棒くほりのへ女のひきひあ
御衣の裏へ馬さくと手比骨
手よてあす材乃郭並
掌者にくちやる女街の裏手沙汰
からトタクと仰母もより袖
ゆくすの膝よもづぬ影さくと
箭を放出ス 多野 お下根

止ひませてひきの東北花の人
あやの行きぬ 行けり 一時

沾沐

西國の旅車の春根並日暮屋に寄りばらすとくより
もひひへかくつるをうめとります
秋本みとひえで余角のうづろ乃

介我門涼技梁技

春帳

九常

仁相傘の六分ハシヒ阿斐里里
義ハシヒ自はラニラニ歎せぬ歎け
禮タツ室玉柱モトミタ吹扇モ
智駿又タヒ壁を馬に附の板
信君々門下車よ圓の時13 千翁

千翁息
不局
玲角
奇角

辰角

玄措

渡り紳格の長毛と云狀人

露沾

伊賀上野宗直

猩々

抜入乃代よりナリキリ紳官内
一休の袖下臭14 喜比須濱

調柯

雪朝

麻巻さて冬の羽多野よはゑ
全寧の庄よりをだする時あが
菖蒲の実のむすみれかーれ
あとも管の持するーれうる
始業い游く旅するーすか
まゝ跡一跡すま歛やーれ

枝垣押堺
賀朝

調山

善角門人
善珠里

霜 水

もくあや馬の宿の草堂
ゑてもく歟別よんまの時
ゆる野のまくらすむかの雪
立雪のちりかの水のぬ

冬 川

入木をあじけりや冬河原
者ひゆき水のそじと波一粒
よそい金の蓋をうきば川
川面のゆき移へる一粒企
白壁のねじ長

水り川

眼民女

臣

東 蓮之
沾 周皎
丹志 竹裏
吳竹 周皎
周志 竹裏

水り川

眼民女

臣

東 蓮之
沾 周皎
丹志 竹裏
吳竹 周皎
周志 竹裏

落葉

果は皆佛の道の落葉外
入相す撞のよまれて落葉外
頃日の下枝すもねの木の葉外
落葉落葉落葉落葉落葉落葉外
起て床て地よ木の葉外
枝落葉と枝をのどをすも落葉外
えいかれ葉落葉外
豆腐ほり尾足舞ね落葉外
小鹿す体にて通る落葉外
一高め至今年の和のわらと外

佳風門 梅 莲之
佳風門 梅 莲之

一漁門 紅涼 吳竹
漁光 吳竹
角 錦 李條

さへ見て不思議な物外
友達のもの身の行のうちも外

さぬくの辻ハ所處奈外

天より不測の事ありと云ふ聖書の事也
今度芥子すまうも

産葉以上も下タみ雀うる
禁じて身のあ禁ノ如葉うれ
漏りにの塵を拂ふる底奈外

雪

うつうや神雪の海牛角
白ぬやとてせ景もひる
而候に見る却一雪の料理禍
きぬし臘のふを越す雪絆

郡山タケチ角畠

云ク溶ム

玉全

沾涼千本

雪朝

長水

賀朝

千洗

江戸公其孫

扇的有林

きり幕や立つうらうひ青も高
うるるよかひく鳥比翼櫛
もう鳥門前限著葉行ひ

旅次

旅人よや方十所ハ五月れ
あらすきを至の松のやや朱葉
旅人よや有り始ひ

枯野

さくよとひ草はいも草とすはよ
さくよとひ草はいも草とすはよ
枯葉り形や葉枝のうろへき
青りシ波の油のせきせき

和敷才門百二
ト宅 東隣 夕佳

布仙

えりのきだ出るの外

豆竹

千鳥

荷物、木車に叶ふらう外

五百武

眼の付、番巷や東の渓を

改室童

傘車

すと、勘定ておもはる外

摺川

鳴て居る物、御小兵する

楚殊

毎房をえと紙を厚すらう外

沾涼門

紅夕

駒けらひきの、をさむる外

布仙

寒

技志こくものよりこじるる

未石

黄葉ハ種のりきまさり

五百武

ちよ氷の根生乃きども

万里堂

千鶴門鵬角

枝志こくものよりこじるる

立石

蓮の実や花してもかへにゆ中 露言ハ

尺草

あ集斧湯の砌人草老人よ一集の首板をかうて
かきすをそよぐをかくすうせんと人よあくせ
あくと鹿鳴せても三千萬年もひふみをかくす
くとあらすのてがくをもかへんとくね
タを浮と筋のほすうれ八十寒衣のをうやとよ
ちの部よて而もりかくなくめどりて坐素朱
の去此不遠のをねて在ふもとてた世の部よ入

生植

京宗直

石青菴

暮四

水仙や馬より様子抱かう
茶の花や丸かくわの花の
じつくりと多よし入の梅宮
枝を葉み見えう分ツ水仙花
水仙のみみみまなり者

霧門沾涼軒吟竹

云く

沾梅

溶く

雜 冬

障子子ハ縁子を以て多難
足跡のそとより着よナされ
勢弱シテねの腕曳キ乃瀧
嚴儀あくや人を八王子
トクモ楠井湯 茶汁
おうやえのこゝの里抗

おう色や底のこゝろ石
萬よりゆき衣冠玉
汲小じす株のこゝりや淀八幡
羊尾

明日多ん角矢を尺すて福壽子
沾涼

左隣
加島氏
好夕
千露
安祖
梅五
有佐
布仙

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像
於白木御長立寸五分
頤阿法師作 住吉奉納一軀
御筆後以岸ノ娘松作之

次正一位乃の傳ハ板阿波師の作宗祇法師恭
仰作にて宗牧よりつる住賀園上野飯東氏
喜三生國尾川瀬洲織田家士と宗牧の門人なり
後爲醫藥居伊賀國とを附屬其政安私左衛門落成
傳る而後服部土芳半左衛門ト云にあくへく年事
二十余年以本室承のころニヤ故即に逝く

初此條を昇りテ土芳も早ち人乞毒如
子ナリ誰いよシハ云はれ改事の云土芳ハ
物本津宗七郎トモ有リムトアリヨアレツモ
向々宗七云土芳在世の時以脚本ニ九余日ミ
多ク連詠シムル由ハアリ後彼孫を語嗟ヒテ
財清一笠よりノアリテ至矣又のみ人との如キヌ
天神の宝號ありとぞ出ヒヨシム人の紙子

天滿宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貢寫
記 一ノセトノ御事ノ記也 之は長門の
久萬ノ 于時享保十四己酉ノ春道芝と云
少翁のひきびへ北凡倫仙条之助ト云沾涼門人いふ
哉、人名の條あり是、之れ芝にあり、連歎吟

乃下指いにて謂ある様に連歌の會など
松をもあらまの草と前生竹より源一
今の大よ應ともども跡すかへてりうか筋に
五月廿二日倫仙止得んとくまむすすく我
やて全般、歎今のみよあらむとて予
辭してさうの本をうながしゆく内る
そのもじる人のふを向ぬ是山只不貫生國長門国蒲刈
皇保十吉七月卒ス
于時七十二人丹野蟹桺道生ノコシ受之トモニ予
佳所ハサキ一人人丹野蟹桺道生ノコシ受之トモニ予
多喜の如く歸影たゞは中よく信人
また茅屋にとどけむるをりきのもとをも當翁
聖守神田宮の境内より遷座する事となり也

人店大明神法樂

影うつすゆと新樹の高角山
硯よし石見の山と朝清秀
床一ややはのくの帆、ねの肩 同極立
遠立の連各法樂

ひの神の鳥帽子をくわゆ
帆がさきの海や底や神の城
さくさよの月一茎と花外本
初も井、あまに浮くや雲の海
みの垣もあーーあ華の庭作り
みきりーーーーーーーーーーーー
まともやまともひされ神 捧 北荒倫仙

中ホーーーーー秋の神路のホーーーー
神詠へさむるーーーーーーーー
妙るそくに唱ふの美とあく凡川
津ホーーーーーーーーーーーーーー
北尾千先 栗木雪覩 川勝丈岳

○様本人九 奉 大本の太本の角なり石見岡戸田郡の
人の持の持の木の木の木の童形を出現もあり

石見岡より化生もと云ふ 口文

神龜元年二月十八日平、口文

持統帝文武帝聖武帝平城帝等の御子は
式人の云其御家は古今の中の事との集八

○下

○共

中の事もさうよろしくお見せせんことをしたと云
古今集の事の事やあらぬ事やひりと云ふ事
本を承るに大切の事とぞ仰せられ候事
今年の日やある日やひりと云ふ事とぞ
よき事とぞ思ひてゐる事とあら半じともあら
かくは思ひてゐる事とあら半じともあら

人店四人ち 桃や人店 ふと金 玉金 捜海人店
まゝ別への人なり

十一月三日 15年 今井山

沾涼子の後継被機と達家を活
諏祖の來當せし至と門弟と携て
宗直の流々と化す匡一を
系譜と詳しげて以て継ぎ
次に右往比明師より墨氏に先達
及現在作者の数勾集くされど
緯とか、寂後に勺合歌仙等

激くに雜支と紋を一々く捺候
あくよほきくまうる古風の公道ある
中止の付をかか今れやゆか浅の事
あ／＼吟嘯の流眸と呼さえ
取より足るゆきまくやまと云爾
涼子の請ひ致て野叟ト宅漫にて
跋寸頃鄙陋と歎か而已

山水徵

雲室上人縮圖

全一冊

此書ハ唐画ヲ学び入ノ為ニ明ノ世ニハ唐伯虎文徵明董其昌
ヲ初メトシ又清朝ニテハ王鼎錢席孫師昌ナド云ル名人ヲ先トシ其餘明清
兩朝諸名家ノ画キ置シ山水圖真跡ノ中ニテ初學ノ人画ヲ成スニ手本トナレ
ベキヲ縮圖セラレシ小冊ナバ画ヲ好ム君子ハ必坐右ニ置ベキ書也

文政八乙酉年仲牘

本石町十軒店

江戸書林

層山堂 西村宗七

